

小学校教員の体育授業に対する苦手意識について

関 耕二・大槻 仁奈・岩田 昌太郎

The Elementary School Teacher's Difficulties of Teaching
in Physical Education Class

SEKI Koji, OTSUKI Nina, IWATA Shotaro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 20 / No. 3

令和6年3月27日発行 March 27, 2024

小学校教員の体育授業に対する苦手意識について

関 耕二*・大槻 仁奈*・岩田 昌太郎**

The Elementary School Teacher's Difficulties of Teaching in Physical Education Class

SEKI Koji*, OTSUKI Nina*, IWATA Shotaro**

キーワード：小学校教員，体育授業，苦手意識

Key Words: Elementary School Teacher, Physical Education Class, Difficulties of Teaching

I. 緒言

学校教育における体育授業は、心身ともに健康な生活を営み、子どもの体力を向上させるものとしての役割を担っており、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ基礎を形成するために非常に重要であるといわれている。スポーツ庁（2023）により行われた令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、体育授業を楽しいと感じる児童生徒は運動時間が長く、体力が高いという実態が報告されている。また、林ら（2023）は、小学校の体育授業において、運動が上手にできたり、友達や先生が自分の考えを認めてくれたりする楽しさを感じることによって、運動に対する愛好的態度及び友達との話し合いや協力関係を示す学習集団機能が向上することを報告している。さらに、岩間（2016）は、小学校の体育授業において、児童が楽しく感じる走運動指導という視点から、授業の内容構成と指導方法を検討した結果、児童はできたことに対して喜びや楽しさを感じたり、走運動に対する意欲、関心及び自信が向上したりしたことを報告している。これらのことから、体育授業においては児童・生徒が楽しさや喜びを味わえるような工夫や、コツがわかるための指導を行うことは、体育授業の楽しさにつながり、運動時間の増加を促して体力向上に対して効果的であると考えられる。

また、子どもの体力低下について二極化が問題視されており、平川ら（2008）は、小学校期における身体活動の重要性を指摘している。また、出井（2014）は、小学校高学年において運動が苦手な児童は、運動有能感の中でも特に身体的有能さの認知が低く、「自分は運動ができない」と思っていることを報告している。このように、子どもの体力低下についての実態を調査した報告は多くみられ、子どもの身体活動を確保する場として、小学校の体育授業が重要視されていると考えられる。

一方、教育現場における課題の一つとして教員の多忙化もまた大きな社会問題になっている。特に、小学校教員は全教科を担当するため、それぞれの教科の教材研究にかけられる時間が限られている。中央教育審議会（2002）は、学校における指導について、子どもが体を動かす楽しさを味わわせ、運動を好きにさせたり、普段運動しない子どもに限られた時間で効率的に運動量を確保したりするなど、子どもの体力の向上に関して重要な意味を持っているものの、小学校においては、専任の体育の教員が非常に少ないことや、例えば、年齢が高い教員の中には児童の発達段階に応じた体育の指導に困難を感じたり、高齢でなくとも、児童に体を動かす楽しさを感じさせることができる指導が必ずしも得意でない教員が存在するという状況があると指摘している。文部科学省

*鳥取大学 地域学部 人間形成コース

**同志社大学 スポーツ健康科学部

(2021)により、公表された義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について(報告)では、多忙化の解決策の一つとして、小学校高学年における教科担任制の導入を進めており、特に、外国語、理科、算数及び体育を優先的に専科指導の対象とすべき教科としている。また、文部科学省(2022)が公表した令和4年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査において、小学校における教科等の担任制の実施状況を報告しており、体育での実施率は小学5年生で22.4%、小学6年生で21.7%となっていた。同じく優先的に専科指導の対象とすべき教科である理科が小学5年生で62.1%、小学6年生で65.4%、及び外国語が小学5年生で47.8%、小学6年生で48.9%であることと比較すると、依然として実施率は低い状況にある。さらに、井筒ら(2000)は、小学校の体育専科教員の設置に関する小学校長の意識について調査し、小学校長が専科教員を必要とする割合とその設置状況の間には正の相関がみられるものの、体育に限っては、必要性の割に設置状況の低いことを明らかにしており、体育の専科教員の設置を積極的に検討すべきであると指摘している。これらのことから、体育授業における専科教員の必要性については検討されている一方で、その設置状況は低く、体育授業において負担感を抱いている小学校教員は少なくないと考えられる。

小学校の体育指導の現状としては、鬼澤ら(2017)が、小学校低学年の学級担任を対象に体育授業に対する意識や指導の実態について調査した結果、低学年担当教員の多くは、体育の重要さは認識しているものの、指導に対する自信がないと回答したことを報告し、その原因を、指導の内容・ポイントの理解不足、よい体育授業のイメージの欠如によるものであると指摘している。また、加登本ら(2010)は、小学校教員を対象として体育授業を行う上での悩み事を調査した結果、教職経験において体育指導に積極的に関与するような経験の違いでみると、研究教科が体育で体育主任の経験をもつ教員は全般的に悩み事の認知が低く、研究教科が体育であるが体育主任の経験がない教員や、研究教科が体育以外で体育主任の経験がない教員と比べて低い傾向があることを明らかにし、体育指導に積極的に関与する立場にない教員に対して、悩み事の解決方法を検討する必要があると指摘している。さらに、宮尾ら(2015)は、小学校教員の体育授業に対する苦手意識について調査した結果、苦手意識を持つ教員も運動や体育に対する愛好的態度を有しており、体育を大切な教科と考えており専門的知識の必要性も感じているこ

とを明らかにした。このように、小学校の体育授業における教員の意識については、体育授業の重要性は認識している一方で、体育や運動指導に対する専門性の視点から、自信のなさや負担感、苦手意識につながっていると考えられる。

一方、岩田ら(2012)が、運動指導に対しては一定の専門性を有する中学校及び高等学校の保健体育教員を対象として、保健や体育の授業を行う上での悩み事を調査した結果、体育授業の悩み事の認知は低い傾向にあったことを明らかにし、学校内外の悩み事における解決方法の現状と望みについて、現状としては「校内の同僚に相談する」が多い傾向にあるが、望みとして学校外の場を求めている傾向もみられたことを報告している。また、嘉数ら(2015)は、中学校保健体育教員を対象に体育授業についての悩みの度合い及び教職歴による差異について調査し、保健体育教員の体育授業についての悩みは低い傾向にあった一方で、教職経験年数別では、若手、中堅及びベテラン関係なくダンス及び武道領域の学習指導に関する悩みが高い傾向にあったことを報告しており、若手教員は、授業の実践に関する悩みを抱えていながらも、生徒指導や部活動指導などそれ以外の役割を求められており、授業の充実や改善に向けて十分に組み立てていない傾向にあることを指摘している。このように、中学校及び高等学校の体育授業における教員の悩みについては領域や教職歴別や領域別に検討しているが、大本ら(2023)は、幼児教育現場における運動遊びに対する保育者の意識と指導の実態について調査し、経験がより少ない保育者ほど運動遊びの指導に対する心配事を抱えていることを明らかにし、保育者の多くが外部指導者の補助的な役割に徹しており、自身が主として運動遊び指導を行うことに対して否定的な意識を示していることを報告している。

以上のことから、小学校教員は体育授業に対して重要性は認識しているものの、苦手意識をもつ教員も多く存在しているが、運動指導の専門的力量や教職歴及び運動領域との関係については不明な点が多い。

そこで、本研究では、小学校教員が体育授業を行う上で困難だと感じている課題について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 対象と方法

1. 対象

本研究では、鳥取県内の小学校に勤務する教員を対象に、質問紙調査法を用いて実施した。

質問紙は 2020 年 12 月に配布し回収した。質問紙の配布に際して、研究の趣旨を説明し研究協力に同意の得られた 91 名から回答を得られたが、質問項目に対して回答が得られなかった等の欠損データを除いた 83 名の教員の回答を分析対象とした。

2. 調査方法

調査内容は、教員の属性に関する質問及び、体育授業に対する悩み事に関する質問とした。

教員の属性に関する質問は、性別、教職経験年数（講師期間を含む）、及び所有しているすべての教員免許状について回答を求めた。

体育授業に対する悩み事に関する質問は、加登本ら（2010）を参考に設定した以下の 19 項目とした（表 1）。19 の質問項目のそれぞれについて、「全く困っていない」を 1 点、「困っていない」を 2 点、「どちらでもない」を 3 点、「困っている」を 4 点、「とても困っている」を 5 点として、5 件法で回答させた。

また、指導上の悩みの実態に関する質問項目は、最も苦手としている体育科の運動領域とその理由、及び体育授業実施において難しいと感じていることの 3 項目であった。最も苦手としている小学校体育の運動領域については、「体づくり運動」、「器械運動」、「陸上運動」、「水泳運動」、「ボール運動」、「表現運動」の 6 項目から選択させ、その理由及び体育授業実施において難しいと感じていることについては自由記述で回答させた。

尚、本研究で分析対象となった 83 名のうち、最も苦手としている体育科の運動領域について回答したのは 77 名、その理由について回答したのは 75 名、及び体育授業実施において難しいと感じていることについて回答したのは 67 名であった。

表 1 体育授業に対する悩み事の分類

教師として教える課題	計画	体育用具の準備や体育施設の管理ができる（施設管理） 体育授業の年間指導計画が適切に作成できる（年間計画） 児童の実態に合わせた教材づくりができる（教材選択） 教える運動についての知識がある（教材知識）
	技術指導	自分が模範を示せない項目の運動を教えることができる（示範） それぞれの運動領域に必要な運動技術を指導できる（技術指導） 児童を安全に運動させる（安全） 安全で効果的な場づくりをすることができる（場づくり） 運動技能を向上させるための指導ができる（技能向上）
	情意	児童の意欲が喚起できる（意欲喚起）
	認識	児童がわかってできる体育の指導ができる（認識指導）
	評定	児童の学習活動を公正に評定できる（学習評価）
子どもを把握する課題	個別指導	授業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる（把握） 運動の苦手な児童への配慮ができる（不得意） 児童たちの運動のつまずきを診断できる（つまずき） 配慮を要する児童のニーズに応えることができる（ニーズ）
	学習集団・規律	適切な学習規律が維持できる（学習規律） 児童同士の協力的な関係がつけられる（協力関係）
	総合的課題	児童が私の授業を好意的に評価してくれる（好意）

加登本ら（2010）を参考にした

3. 分析方法

回答は、質問項目ごとに得点化し、平均値及び標準偏差を算出した。分析は、体育授業に対する悩み事に関する質問項目得点の実態を属性ごとに分析した。

まず、性別による比較を検討するために、男女それぞれの平均値の比較を、性別を独立変数、質問項目得点を従属変数とした対応のない t 検定を用いて分析した。

次に、教職経験年数による違いを検討するために、分析対象者を教職経験年数の合計に基づき 4 群に分け平均値の比較を行った。群分けは、1 群（10 年未満）、2 群（10～19 年）、3 群（20～29 年）、4 群（30 年以上）を設定した。尚、教職経験年数は講師期間を含むものとした。平均値の比較は、教職経験年数を独立変数、質問項目得点を従属変数とした一要因分散分析を用いて分析し、群間の平均値に有意な主効果が認められた場合には、多重比較（Tukey HSD 法）による事後検定を行った。

さらに、運動指導の専門性の有無の違いから検討するために、中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許状の有無によりそれぞれ群間の平均値の比較を行った。平均値の比較は、有り無し各群を独立変数、質問項目得点を従属変数とした対応のない t 検定を用いて分析した。

尚、統計解析は IBM SPSS Statistics 29 を用い、有意水準は 5%未満とした。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 対象とした教員の属性

本研究で対象となった小学校教員は、男性 45 名（54.2%）、女性 38 名（45.8%）であった。また、中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許状を所有している教員は、83 名のうち 12 名（14.5%）であった。さらに、本研究で対象となった教員の教職経験年数は、1～9 年が 28 名（33.7%）、10～19 年が 18 名（21.7%）、20～29 年が 15 名（18.1%）、30 年以上が 22 名（26.5%）であり、1～9 年の教員が最も多く、20～29 年の教員が最も少なかった。

2. 体育授業に対する悩み事について

本研究で対象となった教員全体の体育授業に対する悩み事についての各項目の比率を図 1 に示した。

「子どもを把握する課題」の「個別指導」に分類される「授業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる（把握）」の項目については、53.0%の教員が「とても困っている」もしくは「困っている」と回答し、

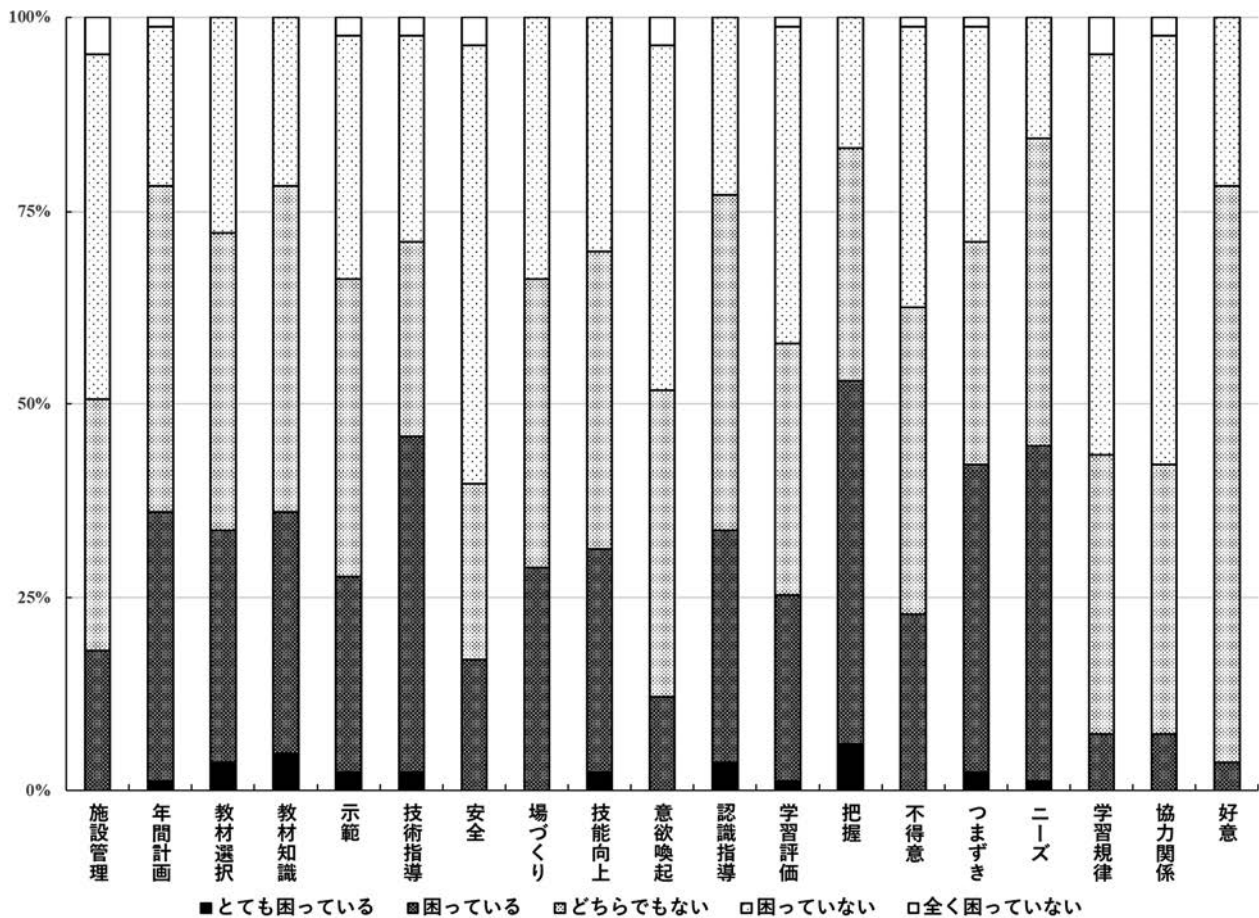


図1 体育授業に対する悩み事の比率

最も高い割合を示した。加登本ら（2010）は、小学校教員の体育授業に関する悩み事について調査し、個別の子どもへの運動指導や技術指導に関する悩み事が多いことを指摘しており、小学校の体育授業において、それぞれの子どもの学びをつかむことに悩みを抱えている教員が多いことが改めて確認された。また、岩田ら（2012）は、中学校校保健体育教員の体育授業における全体として悩みの認知は低いものの、その中でも「把握」の項目は高い値を示していたことを指摘している。これらのことから、学校種に限らず、教員は体育授業を行う上で、一人ひとりの児童・生徒の学びについて把握することを困難に感じ、個別指導に悩みを抱えることにつながっている可能性が考えられる。さらに、米村ら（2007）は、体育授業中の子どもの観察・実態把握において、40人学級よりも30人学級の負担感が少なく、子どもの授業評価に影響する教員の相互作用数が増えることを指摘していることから、座学とは違い児童・生徒がそれぞれに動いていることの多い体育授業に

において、一人ひとりの学びを把握することがより難しいと考えられ、学級編制が体育授業に対する悩み事に影響を与える可能性も考えられる。

一方、「とても困っている」もしくは「困っている」と回答した人数の割合で各項目をみると、「教員として教える課題」の「計画」に分類される「体育用具の準備や体育施設の管理ができる（施設管理）」、「技術指導」に分類される「児童を安全に運動させる（安全）」、「情意」に分類される「児童の意欲が喚起できる（意欲喚起）」の項目は25%以下であった。また、「子どもを把握する課題」の「学習集団・規律」に分類される「適切な学習規律が維持できる（学習規律）」、「児童同士の協力的な関係がつけられる（協力関係）」、及び「総括的課題」に分類される「児童が私の授業を好意的に評価してくれる（好意）」の項目においては10%以下という低い結果であった。加登本ら（2010）の小学校教員を対象とした体育授業に関する悩み事についての研究においても、授業を円滑に進めるための基礎的条件に該当する「情意」や「学

習集団・規律」に関する項目は、本研究と同様に低い割合を示しており、これらは児童との人間関係が構築されていく過程で悩み事が軽減されていくものであると考えられる。さらに、加登本ら（2010）の研究では、「児童を安全に運動させる（安全）」の項目についても本研究と同様に低い割合を示しており、児童は安全管理の知識や危機回避能力がある程度定着していると考えられ、教員が事前に危険を予測し対処できることが増えたり、余裕をもって授業を進めることができたりすることで心配事が減少する可能性も考えられる。それに対して、幼児教育における運動指導に関する大本ら（2023）の報告では、保育者の運動遊びに対する意識について調査し、半数以上の保育者が安全に運動遊びを行うことに対して心配事を抱えていることを指摘している。日常生活全般に関して、常に事故の危険性がある幼児教育においては、安全管理が重要であるため、特に事故の危険性が高まると考えられる運動遊びにおいては、いっそう安全に対して注力するものと考えられる。

また、「個別指導」に分類される「授業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる（把握）」、「運動の苦手な児童への配慮ができる（不得意）」、「児童たちの運動のつまずきを診断できる（つまずき）」、「配慮を要する児童のニーズに応えることができる（ニーズ）」の4項目を「とても困っている」もしくは「困っている」と回答した人数の割合でみると、「運動の苦手な児童への配慮ができる（不得意）」のみが25%という低い結果であった。このことから、小学校教員が体育授業の中で、一人ひとりの子どもに対してそれぞれに応じた対応をすることに悩みを抱えているものの、体育が得意な児童や不得意な児童の大まかな傾向については把握しているため、運動の苦手な児童に対しての配慮や措置を講じることにさほど困難を感じていないと考えられる。

さらに、「体育授業で難しいと感じていること」についての自由記述では、「準備や片付けなどの時間が取られる、運動時間を確保したいがなかなか難しい」「運動量も確保したいし、学んだことの共有も図りたい、45分の中の時間配分と評価」「人数が多い中全員の運動量を確保することが難しいことがある」などタイムマネジメントや運動量の確保に関する記述が多くみられた。

3. 苦手な運動領域について

最も苦手としている小学校体育の運動領域について回答が得られたのは、分析対象者83名のうち77名であり、そのうち理由について詳細な回答が得ら

れたのは、75名であった。

その結果、本研究で対象となった小学校教員が最も苦手としている運動領域は、「表現運動」と回答した教員が34人（44%）と最も多く、男性教員は23人、女性教員は11人であり、半数以上の男性教師が「表現運動」を最も苦手としていた。また、「表現運動」の次に人数が多かった領域は、「器械運動」の22人（29%）、「水泳運動」の11人（14%）、「陸上運動」の5人（6%）、「体づくり運動」の3人、「ボール運動」の2人（3%）の順であった。このように、本研究で対象とした教員においては、小学校の体育授業において、特に表現運動を苦手としており、女性教員と比較して男性教員の苦手意識が強い傾向が明らかとなった。

嘉数ら（2015）は中学校保健体育教員に対して、体育授業における教職歴の差異による悩みについて調査し、若手、中堅、ベテラン関係なくダンスや武道の学習指導に関する悩みが高い傾向にあったことを報告している。また、茅野（2013）は中学校及び高等学校におけるダンス指導の現状と課題について調査し、約3割の男性教員はダンス経験がないと回答し、さらにダンス指導が「嫌い」との回答は男性教員のみであったことを報告しており、ダンスの必修化に肯定的な意見が多いものの、知識や技術が不足していることを指摘している。

このように、「ダンス」及び「表現運動」領域に対しては、運動指導に対して一定の専門性を有する中学校及び高等学校の保健体育教員であっても苦手意識があり、本研究で対象となった小学校教員も同様に苦手意識を有しており、学校種に関係なく、指導が難しいと感じる教員が多い領域であると考えられる。

4. 性別からみた体育授業に対する悩み事について

性別による体育授業に対する悩みの各質問項目における特徴の検討を行った（表2）。

t検定の結果、「体育用具の準備や体育施設の管理ができる（施設管理）」（ $t[81]=2.369, p=0.020$ ）、「体育授業の年間指導計画が適切に作成できる（年間計画）」（ $t[81]=2.115, p=0.038$ ）、「児童の実態に合わせた教材づくりができる（教材選択）」（ $t[81]=3.088, p=0.003$ ）、「教える運動についての知識がある（教材知識）」（ $t[81]=3.264, p=0.002$ ）、「自分が模範を示せない種目の運動を教えることができる（示範）」（ $t[81]=2.689, p=0.009$ ）、「それぞれの運動領域に必要な運動技術を指導できる（技術指導）」（ $t[81]=4.977, p=0.000$ ）、「児童を安全に運動させる（安全）」

表2 性別からみた体育授業に対する悩み事について

			男性		女性		t 値
			n=45		n=38		
項目			M	S.D.	M	S.D.	
教師として教える課題	計画	施設管理	2.44	0.76	2.87	0.88	2.369 * 男<女
		年間計画	2.98	0.72	3.34	0.85	2.115 * 男<女
		教材選択	2.84	0.77	3.39	0.86	3.088 ** 男<女
		教材知識	2.93	0.81	3.50	0.76	3.264 ** 男<女
	技術指導	示範	2.71	0.87	3.21	0.81	2.689 ** 男<女
		技術指導	2.76	0.88	3.66	0.75	4.977 *** 男<女
		安全	2.36	0.71	2.74	0.89	2.126 * 男<女
		場づくり	2.76	0.74	3.18	0.80	2.527 * 男<女
		技能向上	2.78	0.79	3.34	0.78	3.250 * 男<女
	情意	意欲喚起	2.51	0.73	2.71	0.77	1.214
	認識	認識指導	2.91	0.79	3.42	0.76	2.979 ** 男<女
	評定	学習評価	2.62	0.78	3.08	0.88	2.508 * 男<女
	子どもを把握する課題	個別指導	把握	3.18	0.94	3.71	0.61
不得意			2.69	0.79	3.03	0.75	1.977
つまずき			2.98	0.89	3.34	0.88	1.867
ニーズ			3.16	0.71	3.47	0.76	1.973
学習集団・規律		学習規律	2.38	0.75	2.55	0.65	1.130
		協力関係	2.58	0.69	2.34	0.63	1.615
総括的課題		好意	2.73	0.50	2.92	0.43	1.853

単位：点 有意水準***：p<0.001，有意水準**：p<0.01，有意水準*：p<0.05

($t[70.448]=2.126$, $p=0.037$), 「安全で効果的な場づくりをすることができる(場づくり)」($t[81]=2.527$, $p=0.013$), 「運動技能を向上させるための指導ができる(技能向上)」($t[81]=3.250$, $p=0.002$), 「児童がわかってできる体育の指導ができる(認識指導)」($t[81]=2.979$, $p=0.004$), 「児童の学習活動を公正に評定できる(学習評価)」($t[81]=2.508$, $p=0.014$), 及び「授業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる(把握)」($t[76.449]=3.112$, $p=0.003$)の12項目において、男性教員と比較して、女性教員が有意に高値を示した。「教員として教える課題」に分類される項目においては、「意欲喚起」を除くすべての項目で有意差が認められたのに対して、「子どもを把握する課題」に分類される項目においては、「把握」の項目に

のみ有意差が認められた。さらに、「体育授業で難しいと感じていること」についての女性教員による自由記述では、「段階的な練習のさせ方を自分が知らない」「声かけや指導の仕方のできるようになることが増えると思うが、効果的な支援の仕方を知らないとできないことも多い」といった記述もみられた。

このように、男性教員よりもさらに女性教員は、体育授業においてそれぞれの子どもの把握やマネジメントよりも、教材づくりや技術的な側面について悩み事を抱えていることが明らかとなった。

宮尾ら(2015)は、小学校教員に対して、体育授業に対する苦手意識を調査し、女性教員が男性教員と比較して、体育授業の苦手意識が強く、「できるための説明」を難しいと感じていたことを報告した。ま

た、白旗（2013）は、小学校教員の体育科学習指導について調査し、体育指導の他教科と比較して難しいところに関しては、「教え方・伝え方」（指導方法）が男女ともに最も高い数値を示し、特に女性教員は4割以上が困難であると回答したことを報告し、教科書がないことにより、何に向かって、具体的に何を教えたらいのかが、みえにくいことを指摘している。これらのことから、本研究で対象となった女性教員においても、体育授業に対する苦手意識から、目指す姿が想起されにくく、具体的な指導法の充実及び改善に向けて十分に取り組めていない可能性が考えられる。

5. 教職経験年数からみた体育授業に対する悩み事について

教職経験年数により1群（10年未満）、2群（10～19年）、3群（20～29年）及び4群（30年以上）と分類して、体育授業に対する悩みの各質問項目における特徴の検討を行った（表3）。

一要因分散分析の結果、「体育授業の年間指導計画が適切に作成できる（年間計画）」（ $F[3,79]=6.745$, $p=0.000$ ）、「安全で効果的な場づくりをすることができる（場づくり）」（ $F[3,79]=2.871$, $p=0.042$ ）,及び「授

業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる（把握）」（ $F[3,79]=3.028$, $p=0.034$ ）の3項目において、有意な主効果が認められたので、Tukey HSD法を用いた事後検定を行った。

その結果、「年間計画」では、3群の 2.67 ± 0.82 （平均値±標準偏差）及び4群の 2.91 ± 0.75 と比較して、1群の 3.61 ± 0.63 の方が有意に高値を示した（それぞれの有意確率は $p=0.001$, 0.006 ）。したがって、本研究で対象となった小学校教員では、教職歴が短い方が「年間計画」において悩みが多いことが明らかとなった。加登本ら（2012）は、小学校教員が体育授業の力量を形成する上での困難やその解決方法について調査し、教職経験年数5年以内の初任期の教員は、6～15年の中堅期及び16年以上の熟練期の教員と比較して「安全」の項目を除くほとんどの項目において悩み事の認知が有意に高い傾向が認められたことを報告している。また、嘉数ら（2015）は、中学校保健体育教員に対して、体育授業における教職歴の差異による悩みについて調査し、若手教員が中堅教員やベテラン教員と比較して、年間計画の作成に関する悩み事が多かったことを報告している。これらのことから、学校種に関係なく、教員は、学校経営の実態をよく理解していないと年間指導計画を作成

表3 教職経験年数からみた体育授業に対する悩み事について

項目		1群 (10年未満)		2群 (10～19年)		3群 (20～29年)		4群 (30年以上)		分散分析 F値	事後検定 Tukey HSD ($p<0.05$)	
		n=28		n=18		n=15		n=22				
		M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.			
教師として教える課題	計画	施設管理	2.54	0.79	2.56	0.86	2.87	0.83	2.68	0.89	0.585	
		年間計画	3.61	0.63	3.11	0.76	2.67	0.82	2.91	0.75	6.745 ***	3群, 4群<1群
		教材選択	3.18	0.77	3.00	0.84	3.27	1.03	2.95	0.84	0.560	
		教材知識	3.39	0.83	3.17	0.62	3.13	1.06	3.00	0.82	0.961	
	技術指導	示範	3.18	0.94	2.78	0.65	2.87	0.83	2.82	0.96	1.082	
		技術指導	3.36	0.95	3.33	0.84	3.13	0.83	2.82	1.01	1.642	
		安全	2.54	0.79	2.67	0.97	2.47	0.92	2.45	0.67	0.254	
		場づくり	3.25	0.75	3.00	0.84	2.60	0.74	2.77	0.75	2.871 *	3群<1群
		技能向上	3.25	0.75	3.06	0.87	2.80	0.86	2.91	0.87	1.200	
	情意	意欲喚起	2.71	0.76	2.44	0.62	2.53	0.74	2.64	0.85	0.525	
認識	認識指導	3.29	0.76	3.17	0.71	3.07	1.16	3.00	0.69	0.554		
評定	学習評価	2.89	0.96	2.72	0.83	2.87	0.99	2.82	0.66	0.152		
子どもを把握する課題	個別指導	把握	3.57	0.84	3.44	0.92	3.73	0.70	3.00	0.76	3.028 *	4群<3群
		不得意	2.96	0.92	2.72	0.67	3.20	0.86	2.55	0.51	2.571	
		つまづき	3.29	0.81	3.33	0.59	3.07	1.10	2.86	1.04	1.260	
		ニーズ	3.36	0.73	3.39	0.78	3.40	0.91	3.09	0.61	0.803	
	学習集団・規律	学習規律	2.54	0.84	2.39	0.78	2.53	0.64	2.36	0.49	0.352	
		協力関係	2.46	0.69	2.39	0.70	2.40	0.74	2.59	0.59	0.375	
総合的課題	好意	2.75	0.44	2.89	0.47	2.80	0.56	2.86	0.47	0.395		

単位：点 有意水準***： $p<0.001$, 有意水準*： $p<0.05$

することに自信が持てないことが考えられる。

また、「場づくり」では、3群の 2.60 ± 0.74 と比較して、1群の 3.25 ± 0.75 の方が有意に高値を示した($p=0.048$)。さらに、「体育授業で難しいと感じていること」についての自由記述では、「体を動かすのが楽しいと思える場づくり」「時間内に知る・みる・支える・するを充実させる構成を作ることが難しい」「授業の組み立て」「場の設定、児童が主体的に活動するための工夫」といった記述が多くみられた。したがって、教職経験年数が短い教員は、児童が安全に運動し、かつできた実感を味わったり、楽しさを感じたりできるような個に応じた「場づくり」をすることが難しいと感じていることが明らかになった。これらのことは、体育授業が、教室ではなく、グラウンドや体育館、プールと特殊な場で行われるため、

若手教員にとって、それぞれに効果的な学習に向けた場づくりを考えることが困難となっていることが考えられ、それらが経験を積むにつれて理解が深まり、悩み事の認知が減少していく可能性が考えられる。

6. 体育免許の有無からみた体育授業に対する悩み事について

中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許状の取得状況による体育授業に対する悩みの各質問項目における特徴の検討を行った(表4)。

t検定の結果、「体育授業の年間指導計画が適切に作成できる(年間計画)」($t[81]=2.735$, $p=0.008$), 「児童の実態に合わせた教材づくりができる(教材選択)」($t[81]=3.600$, $p=0.001$), 「教える運動についての知

表4 体育免許の有無からみた体育授業に対する悩み事について

			体育免許 有群		体育免許 無群		t 値
			n=12		n=71		
項目			M	S.D.	M	S.D.	
教師として教える課題	計画	施設管理	2.25	0.75	2.70	0.83	1.765
		年間計画	2.58	0.67	3.24	0.78	2.735 ** 有<無
		教材選択	2.33	0.65	3.23	0.81	3.600 ** 有<無
		教材知識	2.25	0.45	3.35	0.78	6.897 *** 有<無
	技術指導	示範	2.00	0.60	3.10	0.81	4.466 *** 有<無
		技術指導	2.08	0.79	3.35	0.83	4.928 *** 有<無
		安全	2.33	0.65	2.56	0.84	0.902
		場づくり	2.67	0.65	3.00	0.81	1.350
		技能向上	2.25	0.45	3.17	0.81	5.667 *** 有<無
	情意	意欲喚起	2.08	0.67	2.69	0.73	2.697 ** 有<無
	認識	認識指導	2.58	0.51	3.24	0.82	2.680 ** 有<無
	評定	学習評価	2.42	0.79	2.90	0.85	1.848
	子どもを把握する課題	個別指導	把握	2.67	0.65	3.55	0.81
不得意			2.25	0.45	2.94	0.79	2.948 ** 有<無
つまずき			2.42	0.79	3.27	0.86	3.199 ** 有<無
ニーズ			2.83	0.72	3.38	0.72	2.422 * 有<無
学習集団・規律		学習規律	2.33	0.65	2.48	0.71	0.660
		協力関係	2.33	0.65	2.49	0.67	0.763
総括的課題		好意	2.42	0.51	2.89	0.43	2.993 * 有<無

単位：点 有意水準***： $p<0.001$, 有意水準**： $p<0.01$, 有意水準*： $p<0.05$

識がある（教材知識）」(t[23.761]=6.897, p=0.000), 「自分が模範を示せない種目の運動を教えることができる（示範）」(t[81]=4.466, p=0.000), 「それぞれの運動領域に必要な運動技術を指導できる（技術指導）」(t[81]=4.928, p=0.000), 「運動技能を向上させるための指導ができる（技能向上）」(t[25.020]=5.667, p=0.000), 「児童の意欲が喚起できる（意欲喚起）」(t[81]=2.697, p=0.009), 「児童がわかってできる体育の指導ができる（認識指導）」(t[81]=2.680, p=0.009), 「授業中に一人ひとりの児童の学びを把握できる（把握）」(t[81]=3.591, p=0.001), 「運動の苦手な児童への配慮ができる（不得意）」(t[81]=2.948, p=0.004), 「児童たちの運動のつまずきを診断できる（つまずき）」(t[81]=3.199, p=0.002), 「配慮を要する児童のニーズに応えることができる（ニーズ）」(t[81]=2.422, p=0.018), 及び「児童が私の授業を好意的に評価してくれる（好意）」(t[13.750]=2.993, p=0.010) の 13 項目において、体育免許有群と比較して、体育免許無群が有意に高値を示し、「施設管理」、「安全」、「場づくり」、「学習評価」、「学習規律」及び「協力関係」を除くすべての項目において、体育免許有群よりも体育免許無群が、悩みが多い傾向であった。さらに、「体育授業で難しいと感じていること」についての自由記述では、「その子にあったアドバイスなのかどうか」「技能向上への適切なアドバイス」などアドバイスに関する記述が多くみられた。

これらのことから、小学校における体育授業では、中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許状を有していない教員よりも、中学校及び高等学校の保健体育科の免許状を有している教員の方が、悩み事が軽減していることが明らかとなった。中学校及び高等学校の保健体育科の免許状の取得に際して、教員養成課程での運動指導に関する専門的な授業や教育実習等が、小学校での体育授業を実践する上で、悩み事を軽減して自信につながっている可能性が考えられる。

IV. 結語

本研究では、小学校教員が体育授業を行う上で困難だと感じている課題について明らかにすることを目的として検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1. 体育授業を行う上で、一人ひとりの児童の学びについて把握することに困難さを感じる傾向であった。
2. 体育授業において、特に表現運動を苦手として

おり、女性教員と比較して男性教員の苦手意識が強い傾向が明らかとなった。

3. 男性教員よりも女性教員は、体育授業に対してより悩みを感じており、特に教材づくりや技術的な側面について悩み事を抱えていることが明らかとなった。

4. 教職歴が長い教員より短い教員の方が、「年間計画」においてより悩みを感じており、特に「場づくり」において悩み事を抱えていることが明らかとなった。

5. 中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許状を有している小学校教員より、保健体育科の免許状を有していない教員の方が、より悩みを感じていることが明らかとなった。

以上のことから、本研究により小学校教員における体育授業に対する苦手意識は、性別や教職歴により違いが認められ、中学校及び高等学校の保健体育科の教員免許を有することで、悩み事が軽減されていることが示唆された。

今度は、小学校教員の体育授業に対する悩み事を軽減するための研修プログラムや、教員養成課程における運動指導の専門的力量についての検討が課題である。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた教員の皆様、学校関係者の皆様に感謝申し上げます。

本研究の成果の一部は、JSPS 科研費 23H00971 及び 22K11655 の助成を受けたものです。また、本研究を遂行するにあたり、有意義な議論と協力をいただいた鈴木勇介氏、名越潤氏及び DUAN JIANAN 氏にも心より感謝いたします。

利益相反自己申告: 著者全員が利益相反はない。

著者の資格と著者貢献

著者 KS と SI は、研究デザインを担当した。著者 KS がデータ収集を担当した。著者 KS と NO がデータ解析を行い、その解釈を著者 KS と SI が担当した。草稿は KS と NO が担当した。すべての著者は、原稿を批判的にレビュー、修正し、投稿を承認した。

主な引用・参考文献

- スポーツ庁(2023)令和5年度体力・運動能力・運動習慣等調査報告書。
- 林修, 塩路文哉, 松葉貴士, 熊代悟志, 南拓哉, 中山和幸, 芝崎円(2023)小学校体育科の楽しさの積み重ねと学習成果との関係: 楽しさ体験と愛好的態度、学習集団機

- 能との関係をさぐる. 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 2022, pp. 122-126.
- 岩間英明(2016)小学校の体育授業における効果的な内容構成と指導方法の検討:児童が楽しさを感じる走運動指導. 松本大学研究紀要, 14, pp. 47-60.
- 平川和文, 高野圭(2008)体力の二極化進展において両極にある児童生徒の特徴. 発育発達研究, 37, pp. 57-67.
- 出井雄二(2014)運動が苦手な小学校高学年児童の体力・運動能力の実態—運動有能感と体力・運動能力の関係から—. 明治学院大学心理学紀要, 24, pp. 47-62.
- 中央教育審議会(2002)子どもの体力向上のための総合的な方策について.
- 文部科学省(2021)義務教育 9 年間を見通した教科担任制の在り方について(報告).
- 文部科学省(2022)令和 4 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査.
- 井筒次郎, 中馬充子, 吉田瑩一郎(2000)小学校における体育の専科教員設置に関する一考察. 日本体育大学紀要, 29(2), pp. 221-227.
- 鬼澤陽子, 安原志帆, 内藤年伸(2017)小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究—群馬県における低学年の体育授業の実態調査を通して—. 群馬大学教育学部紀要, 芸術・技術・体育・生活科学編, 52, pp. 71-86.
- 加登本仁, 松田泰定, 木原成一郎, 岩田昌太郎, 徳永隆治, 林俊雄, 村井潤, 嘉数健悟(2010)体育授業の悩み事に関する調査研究(その1)—教職経験に伴う悩み事の差異を中心として—. 学校教育実践学研究, 16, pp. 85-93.
- 宮尾夏姫, 三木ひろみ(2015)小学校教師の体育授業実践に対する支援の検討:実践状況と指導上の困難さに着目して. びわこ成蹊スポーツ大学, 12, pp. 37-47.
- 岩田昌太郎, 加登本仁, 松田泰定, 木原成一郎, 徳永隆治, 林俊雄, 久保研二, 村井潤, 嘉数健悟, 林楠, 藤本翔子(2012)保健体育科教師の悩み事に関する調査研究. 学校教育実践学研究, 18, pp. 151-158.
- 嘉数健悟, 岩田昌太郎, 木原成一郎, 徳永隆治, 林俊雄, 大後戸一樹, 久保研二, 村井潤, 加登本仁(2015)中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究—教職歴の差異による悩み事に着目して—. 沖縄大学人文学部紀要, 17, pp. 39-48.
- 大本優希, 関耕二, 岩田昌太郎, 近藤剛(2023)幼児教育現場における運動遊びに対する保育者の意識について. 地域教育学研究, 15(1), pp. 1-9.
- 米村耕平, 長町裕子(2007)学級の人数の違いが体育授業に与える影響に関する事例研究:基本の運動単元の分析から. 香川大学教育実践総合研究, 15, pp. 77-85.
- 茅野理子(2013)栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について—ダンス必修化に関するアンケート調査から—. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 36, pp. 25-32.
- 白旗和也(2013)小学校教員の体育科学習指導と行政作成資料の活用に関する研究. スポーツ教育学研究, 32(2), pp. 59-72.
- 加登本仁, 辻延浩, 青木作衛, 中川大介, 八木純子(2012)体育授業に関する小学校教師の力量形成についての調査研究:教職経験年数による差異に着目して. 滋賀大学教育学部紀要, 教育科学, 62, pp. 73-85.